

第 62 回 表現学会全国大会日程（聴講自由）

於 岐阜大学（柳戸キャンパス）

（〒 501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

共催：国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学

第 1 日 令和 7 年 6 月 7 日（土）

会場：岐阜大学柳戸キャンパス共通教育 F 棟 105 講義室

○理事会（10：00～12：00 岐阜大学柳戸キャンパス共通教育 G 棟 1D 講義室）

◇受付（12：30～）

◇開会（13：00）

開会の辞

代表理事 同志社大学

藤井 俊博

会場校挨拶

岐阜大学教育学部長／教育学研究科長

山田 雅博

◇公開講演（13：10～14：20）

「節用集」の近現代表現史

岐阜大学

佐藤 貴裕

◇シンポジウム（14：30～17：00）

国語教育・日本語教育における作文と表現

司会：国立国語研究所

石黒 圭

児童作文の段落分け

講師：富山大学

宮城 信

大学生の執筆プロセスに見る文章構成

中央学院大学

田中 啓行

学習者縦断作文コーパスに見る中国人学習者の説明文の特徴

京都先端科学大学

前川 孝子

学習者縦断作文コーパスに見る多言語話者の接続詞の特徴

国立国語研究所

石黒 圭

◇総会（17：00～17：20）

◇懇親会（18：30～20：30）「ラ・スタシオン」

※会場は、岐阜駅から徒歩3分ほどにある、岐阜シティ・タワー43の4階です。

（岐阜県岐阜市橋本町2-52 058-227-3484）



第 2 日 令和 7 年 6 月 8 日（日）

会場：岐阜大学柳戸キャンパス共通教育 F 棟 105 講義室

◇研究発表（発表 25 分＋質疑 15 分・休憩 10 分）

午前（10：30～12：00）

司会：大東文化大学

須田 義治

明治大学

石出 靖雄

新聞三社における句読法の時代的変遷

早稲田大学（院）

高橋 愛子

川上未映子の『ヘヴン』に対する認知文体論的アプローチ

帝塚山学院大学

伊計 拓郎

〈休憩〉（12：00～13：30）

※日曜日は、学内の食堂や売店が休みとなります。また、会場校周辺には飲食店がありませんので、各自でご用意くださいますようお願いいたします。

午後Ⅰ部（13：30～15：00）

司会：名古屋大学

鷺見 幸美

広島大学

柳澤 浩哉

サッカー報道に見られるメタファー表現—新聞記事の考察から

国士館大学

梶原 彩子

カン・ハンナ短歌における「海外詠」の考察—五感表現を中心として—

城西大学

草木 美智子

午後Ⅱ部（15：00～16：30）

司会：同志社大学（嘱）／関西学院大学（非）

橋本 行洋

國學院大學

小田 勝

日本語感謝表現『ありがとう』の成立

名古屋大学言語教育センター／三重大学国際交流センター／神戸学院大学（非）

百瀬 みのり

百人一首歌の和歌表現史的な捉え直し

共立女子大学名誉教授

半沢 幹一

◇閉会（16：30）

閉会の辞

代表理事 同志社大学

藤井 俊博

会場校へのアクセスは、以下の岐阜大学のホームページを御確認ください。

<https://www.gifu-u.ac.jp/access/>

第62回表現学会全国大会シンポジウム概要

テーマ 国語教育・日本語教育における作文と表現

<発表1>

児童作文の段落分け

宮城 信

発達段階にある児童らの作文の段落構成についての分析は、まだ十分ではないように思われる。そこで本発表では、作文コンクールの応募作品を資料として児童らの段落分けの実態に迫ることを目的とする。分析では作文の適切な段落構成という観点ではなく、発達段階の実態を記述することに意味があると考えられる。すなわちどの段階で段落分けが定着するのか、また、なぜその理由で分けるのかが問題となろう。

児童の段落分けを学年別に調査すると、作文を書き始めた低学年の頃は一段落（段落分けなし）が多く、次第に段落が増加していくが中学年あたりで緩やかになり、その後停滞するといった変化をたどる。このような変化に理由づけをするためには、徐々に大人の書き方に近づくといったものではなく、児童らの文章構成意識、または、児童らにとって段落とは、まとめるものか、切るものかといった段落認定意識を推定する必要がある。本発表では、作文の段落の内容を調査し、段落を分ける基準として児童がどこに注目していくのかについて考察を行う。

段落の問題は、児童がどのように作文するかの実態の一端ではあるが、作文を書くとき、指導するときに非常に有用であると考えられる。

<発表2>

大学生の執筆プロセスに見る文章構成

田中 啓行

大学初年次のライティング教育に関する研究・実践はこれまでに数多くあり、指導項目として文章構成が取り上げられてきた。では、これらの教育を受ける大学生は実際にどのように文章構成を考えているのだろうか。

本発表では、文章を書き出してから書き終えるまでの「執筆プロセス」を分析対象とし、大学生が文章を構成する過程について検討したい。具体的には、大学生が書いた1200字程度の作文とその執筆過程のデータ、および、執筆後に行ったインタビューの談話を資料として、大学生が①書き出す前にどの程度構成を決めているのか、②書き出しの1文、形式段落、文章の終わりをどのように決めているのか、③どのようなタイミングで構成を見直しているのかなどの観点から分析を行う。文章構成に影響を与えるものとして、これまでに習った文章構成の型、指定された文字数などが考えられる。また、実際に書き出してみるとうまくいかず、構成を修正することもあるだろう。

このような文章構成の過程を分析することによって、そこから生じる、あるいは、生じ得ると考えられる問題点を明らかにし、効果的なライティング指導の検討につなげたい。

<発表3>

学習者縦断作文コーパスに見る中国人学習者の説明文の特徴

前川 孝子

本発表では、国立国語研究所の『日本語学習者縦断作文コーパス』(W-CoLeJa: Written Corpus of Learner Japanese) に収録された中国人日本語学習者のデータを用い、彼らが作成した説明文の特徴について考察する。

文章を分析する際のカテゴリ基準として、市川孝(1978)の「文の内容の質的相違」と、中国の文章の種類の一つである「記叙文」の概念を用いる。

市川(1978)の分類にもとづき、文章を構成する各文を「事実を述べた文」と「見解を述べた文」に分け、それぞれについて内容上の分類を行うことで、当該文章の「質的」な様相を明らかにすることを目指す。

一方、「記叙文」とは、「人物の言葉や行動、出来事の経過を記述・描写することによって、特定の中心的な考えを表現・反映する文章」のことである。

日本語の習熟度や経年変化を考慮しつつ、学習者の日本語による説明的文章の特性を検討していきたい。

<発表4>

学習者縦断作文コーパスに見る多言語話者の接続詞の特徴

石黒 圭

日本語を第二言語として学ぶ日本語学習者が、どのように文章執筆能力を獲得していくのか、接続詞に着目して分析する。接続詞は前後の文脈の関係を示すことで、文章の流れを読みやすく、論理的にするのに貢献する一方で、とくに学習者にとって接続詞の用法が難しく、習得に困難を抱えるケースが多い。そこで、本発表では、日本語学習者縦断作文コーパス(W-CoLeJa)に収録された中国語・韓国語・ベトナム語話者の作文データを用い、海外の大学で学ぶ学習者が日本語による文章執筆能力を学部4年間でどのように伸ばしていくのか、その過程を接続詞を用いて分析する。

接続詞の発達過程の研究はいくつか存在するが、同じテーマの作文を対象に、複数の言語話者の接続詞の習得過程を経年的に比較する研究は存在しなかった。このため、接続詞の習得過程は局所的にしか明らかにしえなかった。しかし、W-CoLeJaという縦断作文コーパスを使うことで、学習者の接続詞の習得過程をより高い精度で総合的に追跡できる環境が整った。本発表では、複数の言語話者を有する経年的なコーパスであるW-CoLeJaが、いかに第二言語習得研究に貢献しうるかを示したい。

第62回表現学会全国大会研究発表要旨

<研究発表1>

新聞三社における句読法の時代的変遷

高橋 愛子

明治初期に刊行された毎日（東京日日）新聞、読売新聞、朝日新聞は当初、文語文で句読点の無い記事であった。読点〈〉で「語と語の区切り」や「文中の区切り」を示した記事は刊行直後の明治初期から見られたが、予備調査において、文末（述語が終止用法の文末）に読点が表示される記事が三社とも昭和20年代中頃でも約7割の記事に見られ、全ての記事に現行の句読法が表示されるようになったのは昭和27、8年頃であることが分かった。なかでも客観性を求められる報道記事の文末に読点が付く傾向が見られ、論説や評論など主観的な意見を述べる記事では口語化も文末に句点〈〉の付く現行の句読法の定着も早い傾向にあることが分かった。例えば昭和20年の3月1日付で三社とも全2頁で刊行された新聞では、戦争に関する報道記事全ての文末に読点が表示され（段落末の文末には句読点無し）、社説等の論説記事にのみ現行の句読法が表示されていた。新聞記事の文体において主観と客観という表現性の違いが、句読法の定着に影響を及ぼしていたものと考えられる。

<研究発表2>

川上未映子の『ヘヴン』に対する認知文体論的アプローチ

伊計 拓郎

本研究では川上未映子著『ヘヴン』に対して認知文体論の観点から考察する。まず、認知言語学の知見を日常言語だけではなく詩的言語に取り入れた研究はLakoff and Turner (1989)を出発点として認知詩学として知られるようになった。また近年、Langackerの提唱する認知文法を文学に活かした動きも見られるようになり、認知言語学による文学作品の研究（認知文体論）は学術的にも意義が高まっていると考える。

そして、川上未映子は国内外からの知名度もあり、今後ますます活躍が期待される日本人作家であるので、研究の対象とするのに値するだろう。その中でも『ヘヴン』は斜視が原因でイジメをうける「僕」の視点で語られる一人称小説となっており、特に視界に関連した表現が多く見受けられる。認知言語学に基づいて視点や捉え方といった認知的要素を中心に分析し、この作品の表現の豊かさを明らかにすることを目的とし、さらには、認知文体論の有用性についても検証していきたい。

<研究発表3>

サッカー報道に見られるメタファー表現—新聞記事の考察から

梶原 彩子

本発表では、概念メタファー理論（Lakoff & Johnson 1980）の枠組みから、サッカー報道に見られるメタファー表現を考察する。概念メタファーとは、構造的な対応関係を有する異なる概念領域間の写像関係であり、抽象的で捉えにくい事柄を身体経験に基づく具体的な事柄を通して理解するというものである。スポーツの概念メタファーについては、野球に関する先行研究がある（松井1998、粕山2007ほか）。サッカーという競技の構造の特徴としては、何が起きるのか予測しにくいという構造を持ち、一般的に複雑系のスポーツであると言われる。このような構造の特徴は、サッカー報道には液体メタファー（「流れをつかむ」「こぼした球」など）や速度に関するメタファー（「球回しのテンポ」「リズムを保つ」など）が多く見られることとも関連すると考えられる。発表では、サッカー報道に見られるメタファー表現の実例に基づき、スポーツとしてのサッカーの構造が言語表現にどのように反映されているのかについて述べる。

<研究発表4>

カン・ハンナ短歌における「海外詠」の考察—五感表現を中心として—

草木 美智子

韓国出身の現代歌人カン・ハンナは、2011年来日し、横浜国立大学大学院に在籍して、留学生生活を送った。現在も日本在住であり、歌人、タレント、国際社会文化学者、企業家と複数の肩書を持つ。日本留学後に作歌をはじめ、2019年に第1歌集『まだまだです』を刊行した。刊行後、メディアにも多数取り上げられたが、カンの歌に関する総合的な分析や考察は管見の限り少ない。発表者は文学研究者、日本語教員という立場からも、留學生が学ぶ日本で、カンが「留學生」の視点から海外（日本）を詠んだ歌、つまり「海外詠」を分析することに意義を感じる。

では、カンが詠む歌の語彙や表現には、どのような特徴があるか。調査の結果、カンの歌には、頻繁に「食」関連の語彙や表現が登場することに気づく。さらに分析を加えると、それらには「母」「家族」の姿が重なり、読まれていることにも気づかされる。別言するならば、「食」に対する五感の表現は、「家族」「母国」「母」に接続し、更には、日本食の五感表現と融合して、特異な表現世界を醸成しているからである。この表現世界はカン・ハンナ短歌の中心を形成する特質であり、今後のカン・ハンナ、さらに「海外詠」研究において重要となるであろう。

<研究発表5>

日本語感謝表現『ありがとう』の成立

百瀬 みのり

本発表の目的は日本語の感謝表現「ありがとう」の成立を論じることである。

日本語感謝表現の「ありがとう」は、形容詞「ありがたし」が感謝の定型表現「ありがとう」となったものであるとされるが、その成立過程について論じた先行研究はない。そこで本発表は「ありがたし」が「ありがとう」となった過程を史的に論じ、先行研究を補完する。

調査によれば、形容詞「ありがたし」は、中古に「この皇子の(略)御容貌心ばへありがたくめづらしきまで見えたまふを、」(『源氏物語』・桐壺)のように「ありがたく」が形容詞述語用法かつ情態副詞的用法として用いられる例、「いとありがたくものしたまふ深き御気色を見れば、」(同・若菜上)などの「ありがたく」が明確な情態副詞的用法である例を経て、中世に「ありがたく/ありがたう覚ゆ」という形式の固定化を見、近世に入り「ありがたう/ありがとう」が成立する。

<研究発表6>

百人一首歌の和歌表現史的な捉え直し

半沢 幹一

古典和歌のアンソロジーとも言える百人一首には、その注釈、評論、鑑賞などの本も数多いが、それらを瞥見すると、一首の表現自体のありようからは不可解に思われる解釈がある。これはそれぞれの和歌に関するさまざまな情報のバイアスによるものであろう。

本発表では、言語芸術として自立した和歌という立場に立ち、百人一首の和歌を捉え直してみたい。

具体的には、枕詞を用いている和歌を取り上げる。百人一首には、「あしびきの」「しろたへの」「ひさかたの」「ちはやぶる」という4種の枕詞が6首に見られる。枕詞はとりわけ万葉歌における代表的な修辞であるが、百人一首が選ばれた新古今の時代にあって、どのように受け止められ再評価されたのか、それぞれの枕詞の歴史を確認したうえで、改めて一首としての解釈の捉え直しを試みたい。